

令和二年度
名寄市立大学
一般入試 後期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、センター試験受験票、本学受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

思えば、昔の地域共同体にも、親族や家族の中にも、とりあえずは、そこにいてくれるだけでいい、という人たちがいっぱいいたはずなのだ。

障がい者、幼い子ども、妊婦、乳飲み子を抱えた女性、高齢者、病人のことを考えてみればすぐわかる。一時的かどうかを別にして、これらはみな、何らかの「すること」が十分にできない人たちだ。

思想家で、重複障がいの娘をもつ最首悟さいしゆごさんは、「障がい」という言葉を「差し障りがあること」と言い換えてみることを提案している。そうすると障がいの意味が広がって、いわゆる障がい者ばかりでなく、幼い子どもも、高齢者も、病人も、みんな差し障りがある人たちだ、ということがわかる。

そればかりではない。ふだん健常者とか健全者と呼ばれ、また本人もそう思っている人たちだって、多かれ少なかれ、何らかの意味で差し障りがあるものだと見えてくる。みんな幼かった時があり、刻々と年をとっている。老いればみな、以前は難なくやっていた「すること」がでさなくなる。また、誰にだって好不調の波はある。病気もする。何ひとつ思うようにならない日もある。気分が乗らない日も、落ち込んでいる日も。

人間なんて所詮、そんなに強い存在ではない。「今日は何もしないで、ここにこうしているだけでやと……」という気分は誰にも覚えがあるはずだ。ならば、こう言ってもいいのではないか。世界中、誰もみな差し障りだらけの人生をきているのだ、と。

誰もある種の「不能性」をもっている。つまり、みんな、「すること」がちゃんと「できない」存在なのである。それなのに、ある人が何ができないからといって、生きる資格を問われたり、人間としての価値を疑われるなどということがあっていいだろうか。コミュニティの中で、誰かができない分を他の人がするというふうに、みんながお互いに足りないところを補い合いながら、助け合い、支え合って生きる。それが人間的な社会というものだろう。

つまり、こういうことだ。もともとぼくたちはみな、この世界というコミュニティの中にいるだけいいのだ。その上で、何をするか、何ができるか、はおまけのようなもの。そう言って悪ければ、「する」は「いる」という幹から分かれ出る枝葉のようなもの。

もちろん、生きているだけのために、「すること」や「しなければならぬこと」はたくさんあって絶えることがない。「すること」が生きがいになることもあれば、生きる目的だと感じられることもあるだろう。それでも、「すること」が目的になって、「いること」がそのための単なる手段になり下がることがあってはならない、とぼくは思う。

でも、そのあつてはならないことを現実化してきたのが、ぼくたちが生きている「するする社会」だ。最首さんが指摘するように、人間にはつきものの「些細なミス」が許されない、「ゴロツと横に

なりたい気分」のやり場に困る、「のんびんだらりとした時間」を過ごす余地がない、窮屈なストレス社会なのだ。

「するする社会」は障がい者や高齢者にとって生きづらいばかりではない。今は健康で、若さと競争力にあふれていると感じ、膨大な「すること」リストを抱えて張り切っている人にとってさえ、結局のところ、ろくな社会ではない。まともな社会とは、強い人も弱い人も、元気な時にも病気の時にも、差し障りがあるうがなかるうが、誰もが一人前の人間として、「そこにいること」を認め合いい、「共に生きていること」を尊重し合うことのできる社会を言うのだ。

(中略)

ぼくがアメリカに暮らしていた八〇年代、もとは首狩りを意味した「ヘッド・ハンティング」という言葉が、高給を餌にして他社の優秀な幹部を自社へと引っぱり込むことを意味するようになった。それはやがて日本にも上陸、ビジネス用語として広く使われるようになる。それは要するに、すでにできあがっている強者を力で集めて最強の組織をつくるという、じつに単純な組織論だ。こんなふうにしてつくられる組織というものは、しかし、じつはひどく脆いものにすぎないのではないか。

ヘッド、つまり頭ばかりが集まっていて、生身の身体も心もない。そこには事故も、病気も、障がいも、老いも、死も、入り込む余地はない(そんなのは保険会社の仕事)。あるのは、競い合いによつて研ぎ澄まされた「する」能力ばかり。だが、ビジネスを成功させるために「するべきこと」を「する」という目的以外に、彼らビジネスマンたちが「そこにいる」理由は何もない。これではまるで高性能の最新鋭ロボットを揃えたようなものだ。

「すること」「できること」が誰の目にも明らかに見える間がいい。しかし、世の中が変わり、その「すること」の意味が改めて問われるような時が来れば、強者の集まりとしての「するする社会」は脆弱だ。いざとなれば、誰もが抱えているはずの「弱さ」を否定してきた組織ほど本当の意味で弱いものはない。逆に、互いの「弱さ」を認め合いながら、補い合い、支え合ってきた組織こそが粘り強さを発揮することだろう。

『「しないこと」「リストのすすめ 人生を豊かにする引き算の発想』辻信一著 ポプラ新書 二〇一四年より)

問 傍線部「互いの「弱さ」を認め合いながら、補い合い、支え合ってきた組織こそが粘り強さを発揮することだろう」という筆者の意見について、あなたの考えを八百字以上千字以内で述べなさい。